



学校法人 佑愛学園  
愛知医療学院短期大学

— 2011年度 —

# 学生と教員が共に前進する 授業評価レポート

2012/6/20

Answer 05

Answer 04

AICHI Medical College for Physical  
Occupational Therapy AICHI Medical  
Physical and Occupational Therapy  
College for Physical and Occupatio

第 3 卷

Answer 03

Answer 01

## 第3巻の授業評価レポート発刊に寄せて

本学の授業評価レポートは「学生と教員が共に前進する授業評価レポート」という副題が付いています。これは授業評価の真の目的を表しています。

学生による授業評価がスタートした頃は、「学生が教員の講義に文句を言うなんて」という考えも少なからずありましたが、それも昔、今では教員にとって自分の授業内容を客観的に判断できる良い機会です。第3巻では教員が前年度のレポート結果を参考にして、2011年度の授業を進めた結果が報告されています。

今後は教員が授業内容を見直すのみではなく、学生の予習復習時間や積極的な質問などの授業態度の見直し対策を講じていくことが必要だと思えます。これは発刊以来の課題となっています。

2012年度は本学にとって初めて一般財団法人短期大学基準協会による第三者評価を受けます。来年度の授業評価レポートはその結果を受けて更に改善が進むであろうと思えます。

かなりの時間と労力を費やす授業評価がなれ合いに終わるのではなく、学生と教員がいっしょになって、良い成果を実らせる努力を積み重ねていくことを願っています。

最後に発刊の労をとっていただいたFD委員会の方々に深謝いたします。

FD委員会委員長

万歳 登茂子



# 目次

## ■ 資料

1. 学生による授業評価アンケート設問項目
2. 学生による授業評価アンケートの回答方法
3. 学生による授業評価アンケートの実施要領
4. 学生による授業評価アンケートの実施要領

## ■ 授業評価レポート

1. 荒谷 幸次[理学療法学専攻] 学生の自主勉強時間を増やすには? ..... 5
2. 伊藤 宗之[作業療法学専攻] 挫折と反省の日々 ..... 7
3. 岡田 智子[作業療法学専攻] 学生の授業評価を受けて ..... 9
4. 加藤 真弓[理学療法学専攻] 日常生活活動学、実習を学生授業評価から振り返る ..... 11
5. 加藤真夕美[作業療法学専攻] 実技の修得を支援する方略、模索中 ..... 13
6. 木村菜穂子[理学療法学専攻] 学生の「興味」と「理解」と「取り組み」 ..... 15
7. 島田 隆道[作業療法学専攻] 能動的な学習の場をめざして!? ..... 17
8. 鳥居 昭久[理学療法学専攻] ～家族と考える「いのち」のこと～ ..... 19
9. 野原 早苗[理学療法学専攻] 子どもの治療に対する興味 ..... 21
10. 原 和子[作業療法学専攻] 臨床での問題解決に結び付けられる学習を目指して ..... 23
11. 林 修司[理学療法学専攻] 1年生での実習課題とレポート作成 ..... 25
12. 舟橋 啓臣[理学療法学専攻] 理解し易い講義を工夫 ..... 27
13. 堀部 恭代[作業療法学専攻] 学生授業評価結果からみた講義の課題 ..... 29
14. 松村 仁実[理学療法学専攻] 基礎知識の理解と自己学習への発展 ..... 31
15. 万歳登茂子[作業療法学専攻] 改善したのは私? 学生? ..... 33
16. 宮津真寿美[理学療法学専攻] 試行錯誤の4年目 ..... 35
17. 山下 英美[作業療法学専攻] 学生が体験することを通して得られるもの ..... 37
18. 横山 剛[作業療法学専攻] 面接評価実践による授業 ..... 39

# 学生による授業評価アンケート設問項目

(2011年度 前後期計2回配布)

## 学生による授業評価アンケート

### 質問項目

#### \*授業の内容について

1. 授業の内容は、あなたにとって、興味深いものでしたか
2. 授業の内容は、あなたにとって、理解しやすいものでしたか
3. 授業の内容は、シラバス(講義概要)に沿ったものでしたか
4. 授業の内容は、後輩にも推薦したいと思いますか
5. シラバスは、理解しやすい内容でしたか

#### \*授業の方法について

6. 授業の進み具合は適切でしたか
7. 授業中の教員の声は、明瞭で聞き取りやすいものでしたか
8. 授業中のマイクの使用は適切でしたか(マイク使用した場合)
9. 板書(黒板)やモニター提示(パソコン)の量、文字の大きさ、書き方などは適切でしたか
10. プリントやビデオなどの補助資料は授業の理解を助けてましたか(補助資料があった場合)
11. 指定された教科書や参考図書、参考文献などの使用は適切でしたか

#### \*授業担当者について

12. 講義の準備を十分にしていたと思いますか
13. 意欲的に、熱意も持って取り組んでいましたか
14. 授業の開始時間、終了時間をきちんと守っていましたか
15. 私語など授業を妨げる行為に対して適切な対応をしましたか
16. 学生が質問したり、意見を述べられるような配慮がなされていましたか

#### \*あなたの授業態度について

17. この授業に対して熱心に取り組みましたか
18. 理解できない点などを質問しましたか
19. 予習、復習などの時間をとりましたか
20. この授業に休まずに出席できましたか
21. この授業に遅刻したり、早退せずに出席できましたか
22. シラバスに記載されている「学習到達目標」や「履修上の注意」を意識して学習に取り組みましたか

#### \*授業担当者からの質問 (授業担当者が任意に設定する)

- 23.
- 24.

#### \*総合評価

25. この授業の総合評価を5段階(1.最も悪い~5.最も良い)でしてください

## 学生による授業評価アンケートの回答方法

(2011年度 前後期計2回配布)

科目名： \_\_\_\_\_ 担当教員名： \_\_\_\_\_ 記入日： \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日

\*それぞれの質問に次の5段階で回答し、マークシートに記入してください。

- |            |                |
|------------|----------------|
| ①そうは思わない   | ②あまりそう思わない     |
| ③どちらともいえない | ④どちらかと言えば、そう思う |
| ⑤そう思う      |                |

\*17～22の質問には次の5段階で回答し、マークシートに記入してください。

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| ①できなかった・しなかった | ②あまりしなかった       |
| ③どちらともいえない    | ④どちらかと言えばできた・した |
| ⑤できた・した       |                 |

\*23～25の質問には授業担当者からの質問に回答し、マークシートに記入してください。

\*自由記述

この授業で受けた感想を自由に書いてください

よかったと思う点

改善すべきだと思う点

アンケート内容で追加したほうがよいと思われる項目

# 学生による授業評価アンケートの実施要項

(2011年度 前後評価調査実施要項)

## 2011年度 学生による授業評価調査実施要項

### 1. 実施目的

学生による授業評価アンケートの実施は、本学自己点検・評価規程にもとづいて行われ、アンケート結果を参考に授業の改善をはかり、本学教育の質の一層の向上に資することを目的とする。

### 2. 実施方法

2008年度開講科目を対象として、各授業単位でアンケートを実施する。

アンケートは、各教員が担当する授業科目で実施する。

アンケートは、各授業の最後の20分程度を利用して、学生代表が配布し、その場で回収後に封筒に入れ密封して教育研究推進課に届ける。

### 3. アンケート内容

- I. 授業の内容について 5問
- II. 授業の方法について 6問
- III. 授業担当者について 5問
- IV. 学生自身の授業態度について 6問
- V. 担当教員独自の設問 2問
- VI. 総合評価 1問
- VII. 自由記述(授業の良かった点、改善すべき点)

### 4. 調査結果の集計

調査結果の集計は、自己点検・評価委員が行う。

### 5. 調査結果の配布

実施した専任教員および嘱託講師には、個人集計結果ならびに全学集計結果に成績平均点分布表を添えて配布する。

### 6. 実施結果の公表

個人集計結果を除き、全学集計結果を本学ホームページにて公開する方向で検討する。

2011年度前期・後期  
自己点検・評価委員会

# 学生による授業評価アンケートの実施要領

(2011年度 前後期計2回実施)

2011年度 「学生による授業評価調査」実施の学生への説明

学生の皆さんへ

## 「学生による授業評価アンケート」への協力をお願い

自己点検・評価委員会

本学では「授業の質」を高めることを目的として、毎学期末「学生による授業評価アンケート」を実施しており、今学期末にもこれを実施いたします。このアンケートが皆さんの成績評価に影響を与えることは決してありませんので、安心して率直な回答をお願いします。本学の授業を、より良いものにしていくために自分の意見を反映させるのだ、という気概を持って真剣に取り組んでいただきたく思います。実施を控え皆さんにご連絡すると共にご協力をお願い致します。

### 実施科目：

全科目・全クラス(但し、3年次演習、ゼミ、卒業研究、学外実習、等 特別な科目を除く)

### 実施時期：

各科目の最終授業日(但し、最終日発表等が予定されている科目については、最終日の1週前の授業)原則として授業の最後に実施します。

### 実施方法：

「授業評価」実施にあたって、代表の学生にアンケート用紙の配布と回収をお願いすることにします。代表に選ばれた学生の皆さんには、お手数をかけますが、アンケート用紙を回収後、事務室に届けてくださるようお願いいたします。

所要時間：約20分程度



## 学生の自主勉強時間を増やすには？

あらたに こうじ  
荒谷 幸次

### 担当科目

- 運動学
- 検査測定法・実習
- 整形外科系障害理学療法治療学・実習
- 物理療法学実習
- 人体触察法実習
- 理学療法研究法

### プロフィール

中京大学体育学部健康教育学科(体育学士)、専門学校愛知医療学院卒業、星城大学大学院修士課程修了(保健学)、理学療法士、障害者スポーツトレーナー、中級障害者スポーツ指導員。主に整形外科疾患やスポーツ現場、障害者スポーツ分野に携わっており、私自身も切磋しながら、動いて幅広く現場で求められる人材育成を目指します。

### はじめに

現在の大学生は、大学選択に関して自分の意思ではなく、親や高校進路指導の先生から薦められて入学してくるケースが多いといわれている。実際に本学のような専門職養成施設においてもそのような学生が年々増加している傾向が見受けられる。従来は、高校卒業までに本人あるいは、家族が理学療法を受けた経験があり、実際に理学療法の場面を見て自らの意思で入ってくる学生が大部分であったが、現在は職業意識が成熟していない学生が入学してくるケースが少なくない。我々もそのような現実を受け入れ、現在の学生気質に合わせた対応が求められる。

それと比例しているかどうかは定かではないが、職業意識が低い学生が理学療法士としての魅力を感じず、十分な自主勉強時間が作れないまま最終的に成績がふるわず退学する学生も少なくないように思える。そのような学生に対して、いかに自主勉強時間を増やすかということが重要なポイントであり、授業評価アンケートの結果をもとに、2011年度の「運動学」と「整形外科系障害理学療法治療学」の講義を振り返り、今後の課題を考える。

## 授業評価結果から考えること

運動学は、1年次の必須科目であり、理学療法士・作業療法士にとって非常に重要な科目の一つであり、欠かせない科目となっている。また、整形外科系障害理学療法治療学については、2年次の必須科目で、障害、実際の理学療法(治療)などを学ぶ講義であり、臨床実習に直接関与する科目でもある。

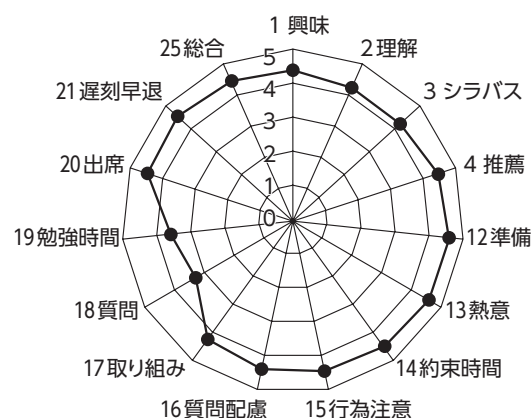
授業アンケートの結果は、両科目とも授業内容は概ね良好な評価であった。しかし、学生自身の取り組みである質問をする、自主勉強時間を確保するという項目が他の項目に比べ、明らかに低かった。授業内容については、概ね問題ないという結果だが、自主的に問題意識をもつことや、自然と興味を抱き自ら進んで勉強することができていないといえる。考えられることとして、講義内容が情報を与えすぎてしまっている、また好奇心を抱くような内容となっていないということが推測できる。

## 今後の課題

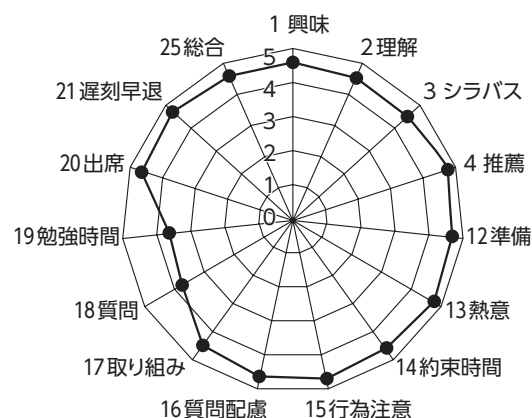
職業意識が成熟していない学生が多い現状の中で、学生に好奇心や関心を持たせるような授業展開をすることは非常に重要と考える。どのようにすれば、好奇心を抱いてもらえるのか非常に難しい課題であるが、好奇心、関心、興味を持たすことが自主的な勉強につながることは、当然である。

昨年も同じような課題を挙げたが、日常での出来事との関連性を例にあげる、実技を通して、学生の身体機能や動作の変化を感じてもらい、また講義内容がどのように臨床で活かされるかなどを伝えていくことが課題である。いかに好奇心を抱かせるか、本分野に関心を持たせるかということを意識して授業を展開していきたい。

運動学下肢  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)



整形PT学・実習  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)



## 挫折と反省の日々

いとう むねゆき  
伊藤 宗之

### 担当科目

2011年度は神経学(2年次)、人間発達学(1年次)の授業を行った。この2科目のうちから、評価レポートで毎回取り上げている神経学を選んで、最近4年の変移を調べた。

### プロフィール

遥か遠い昔、当地の医大を卒業して以来、各地の実験研究施設を遍歴してきた。生理学を専攻した。本大学開設を期に大学人になる機会を与えられた。現在は動物実験から離れ、今年度は神経学、人間発達学、一般臨床医学の授業を担当している。研究面では心電図、脳波などの記録を行いたいと思っている。

### 評価の経年変移

各項目について点数の変化を直線になぞらえた。15項目中13項目で残念ながら低下傾向を示した。

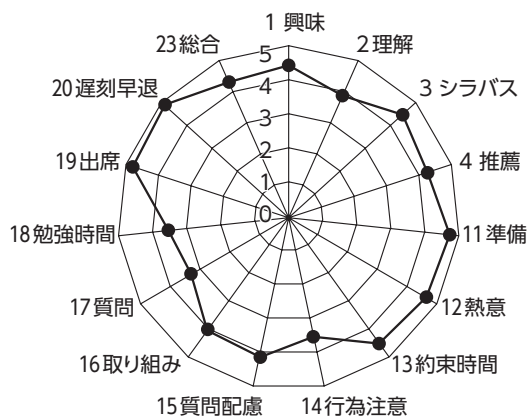
### 今後

次の4年間ですべての項目について上行線に一转すべく担当科目の知識を増やすしか道はない。

2008年度の結果

神経学

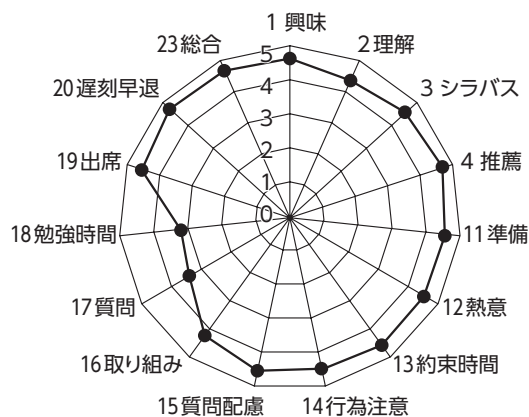
1～4 授業内容、11～15教官  
16～20学生、23総合  
(軸単位：5段階評点)



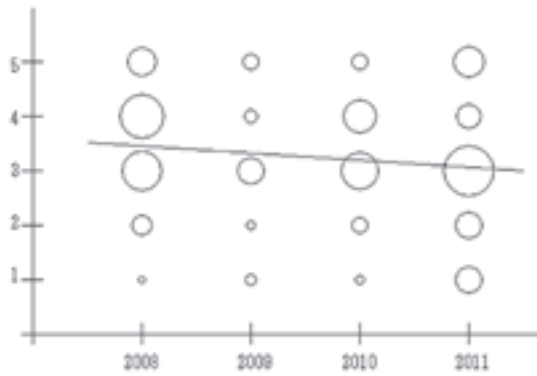
2009年度の結果

神経学

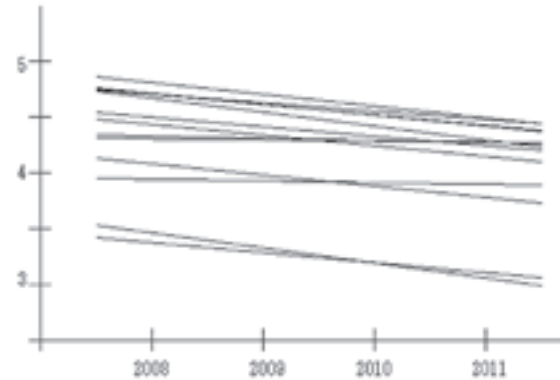
1～4 授業内容、11～15教官  
16～20学生、23総合  
(軸単位：5段階評点)



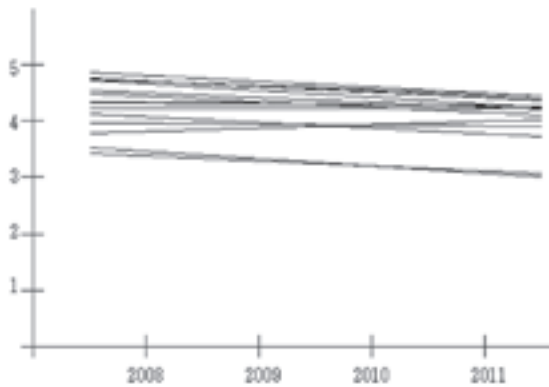
丸の大きさは人数



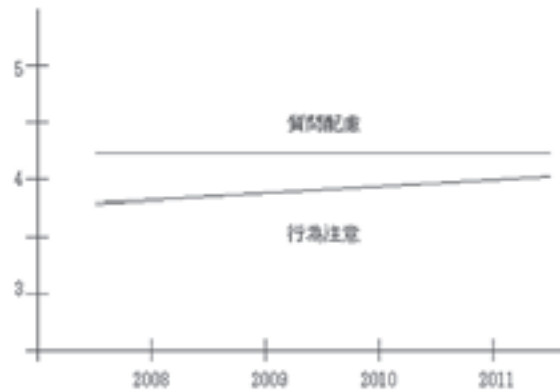
下行を示した13項目



全15項目の経年変化、全体の下行傾向は明らか

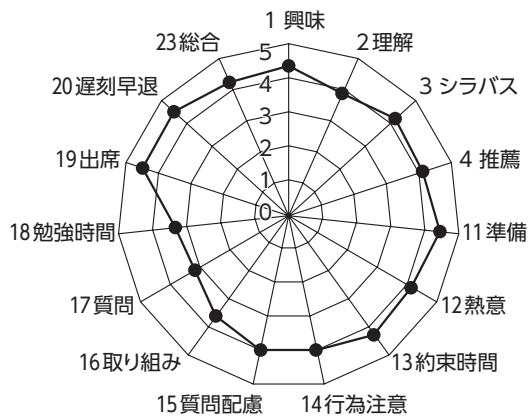


僅かな上行を示した2項目



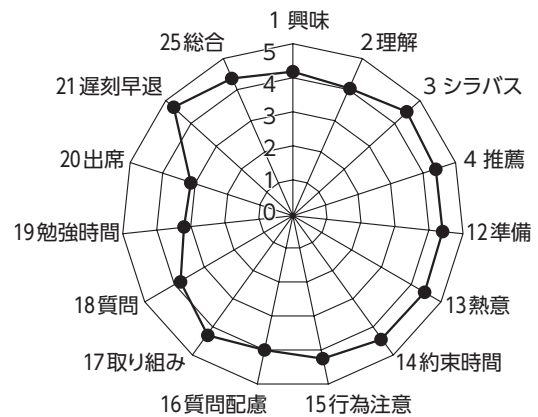
2010年度の結果

神経学  
1～4 授業内容、11～15教官  
16～20学生、23総合  
(軸単位：5段階評点)



2011年度の結果

神経学  
1～4 授業内容、11～15教官  
16～20学生、23総合  
(軸単位：5段階評点)



## 学生の授業評価を受けて — 高次脳機能障害作業治療学 —

おかだ ともこ  
岡田 智子

### 担当科目

- 作業療法概論  
(ICF、関連法規、身体障害領域)
- 運動学実習
- 作業療法治療学概論実習
- 身体障害作業評価学
- 身体障害作業治療学実習
- 高次脳機能障害作業治療学

### プロフィール

2002年、広島大学医学部保健学科作業療法学専攻卒業。2012年、金沢大学大学院医学系研究科博士前期課程修了(修士：保健学)。医療法人偕行会 名古屋共立病院を経て、偕行会リハビリテーション病院勤務。2007年より専門学校愛知医療学院、2010年、愛知医療学院短期大学助教、現在に至る。

### 2011年度の授業評価結果

高次脳機能障害作業治療学についてレポートする。

2011年度の授業評価についてレーダーチャートに載せた。5段階評価としては良い評価であるが、学生の勉強時間についてはまだ十分とはいえないようである。アンケートの自由記載からも資料やVTRの活用、臨床経験の話しがよかったとの声もあった。ただし、自由記載としての授業を受けた感想として「(臨床経験や資料により)わかりやすかった」「楽しかった」「興味を持てた」など短文で書かれてあることが多

く、授業内容に関する具体的感想は見あたらなかったため、レーダーチャートでの興味は高い評価であるものの、実際に学生がどのように何に興味を持てたのかは疑問に残る。それでも、難しく興味があまりなかったが、授業を受けて興味を持てたという学生もおり、難しく覚えることが多い科目ではあるが、学生の勉強への動機付けとしては、臨床の話を学生に伝えることの重要性は再確認できた。

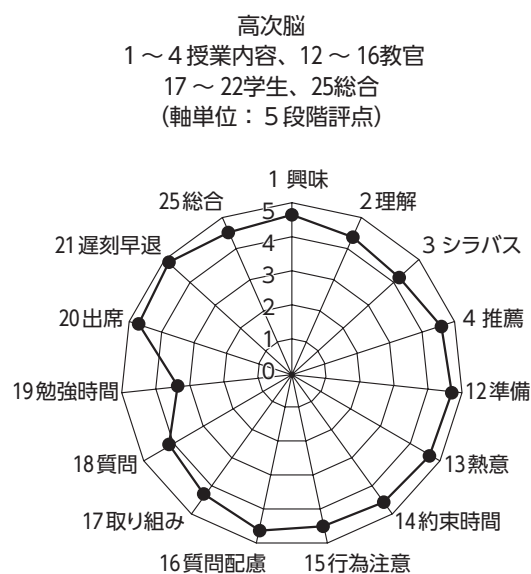
## 授業を振り返って

2011年度はそれぞれの高次脳機能障害に対する作業療法例の内容を昨年の内容より増やした。その分、検査の具体的な方法の教授は少なくした。検査方法は高次脳機能障害に関する様々な書籍に書かれてあり、必要に応じて学生自身で学べることであるが、具体的な作業療法例についてそれは難しく、学生がより高次脳機能障害に対する作業療法に関心を持ちやすいと思われたためである。また、作業療法の役割を確認する機会としても有効であると思われた。しかし、実際は、評価実習で検査方法について戸惑いがあったようである。決して高次脳機能障害に関する検査においてのみ戸惑いがあったわけではないが、患者への検査導入で配慮すべき点や、検査方法で特に注意すべき点については、実習前にしっかり復習するように促すことが必要であった。

以前は評価の視点や方法を細かく具体的に提示したり、臨床上の話しを盛り込んで、教科書の知識から臨床で役に立つ内容を授業プリントとして作成し、それを基に講義していた。当時の学生からは、そのような講義後に講義内容で印象に残ったことや疑問に思ったことを具体的に感想として言葉にでき、学生の理解度を測ることができた。また、感想を述べることで、学生自身、理解して記憶に残していったようであった。しかし、具体的な感想を文章に表現することが難しい学生が多くなり、授業中に感想を直接聞くなどの対応が必要かもしれない。

## 今後の課題

授業が楽しかった、興味を持てたとの感想があるものの、実習でどんなことを見学し経験して学んできたか、作業療法士として何が大切であるかという先を見越した学生の思いはまだ引き出せていないようである。今後は、学生が具体的に何が楽しいと感じたのか、何に興味を持てたのかを確認しつつ授業を進めることによって、授業内容を検討していこうと思う。



## 日常生活活動学、実習を 学生授業評価から振り返る

かとう まゆみ  
加藤 真弓

### 担当科目

- 中枢神経系障害理学療法治療学
- 中枢神経系障害理学療法治療学実習、
- 日常生活活動学
- 日常生活活動学実習
- 臨床運動学
- 地域理学療法実習(高齢者健康増進教室)

### プロフィール

専門学校愛知医療学院理学療法学科卒業。学校教育の中での悩みから心理学に興味をもち、愛知淑徳大学大学院心理学研究科心理学専攻に進学し修士修得(2010)。研究課題は、高齢者の健康増進・介護予防、思考などについて。

### 授業評価結果

2010年度の総合評価は3.9であったが、2011年度は4.5であった。2010年度と同様に「18.理解できない点などへの質問をしたか」、「19.予習、復習などの時間をとったか」の2点において低かったが、2011年度は点数が高くなっていた。

自由記載欄には、感想として、「グループワークでは自分で調べたことはきちんと理解できた」、「自分達で考える時間があってよかった」、「実技は分かりやすかったが、実際にやるのは難しく苦戦した」、「日常生活動作について自分で考えることができてよかった」などがあっ

た。良かった点として、「他のグループが調べたことの理解を深める時間があった」、「分からないところを丁寧に教えてくれた」、「グループワークを行うことで他人の意見を聞くことができた」などがあった。改善すべき点として、「早口である」、「トランスファーの実技を行う時間がもっと欲しかった」などがあった。

### 授業で行っている工夫

2011年度は「学び合い」を念頭に行った。事例提示や臨床実習後の3年生に患者役として協力してもらい、ADL評価演習や補装具を実際に

使用し体験しながら理解を深めること、臨床実習で診る機会が多い疾患の病態や日常生活動作の特徴を調べ、学ぶような課題設定をしたことは以前と同様だが、グループ作りと発表方法に一工夫した。

まず、ベースのグループを作り、このグループ内で課題の疾患担当を決めた。次に各担当疾患グループとなり各疾患の特徴、必要なリスク管理や日常生活動作訓練について調べレポート作成と発表をする。発表は、実技を含めて行い学生が学生を教える形態をとった。その後、ベースグループに戻り、自分自身が勉強した疾患毎の日常生活動作訓練等について制限時間内に構成員が理解できるように説明し、疑問を解決する時間を作った。つまり、2度同じ内容に触れることとなり、理解を深めやすくなるしくみである。また、教科担当からも最後にまとめとして、疾患毎で押さえておいて欲しいポイントを説明した。

トランスファー実技においては、基本的な介助法を教授後に、臨床実習後の3年生に患者役として協力してもらい、問診・視診・事前情報から介助法・量を決定し実技後に振り返りを行った。

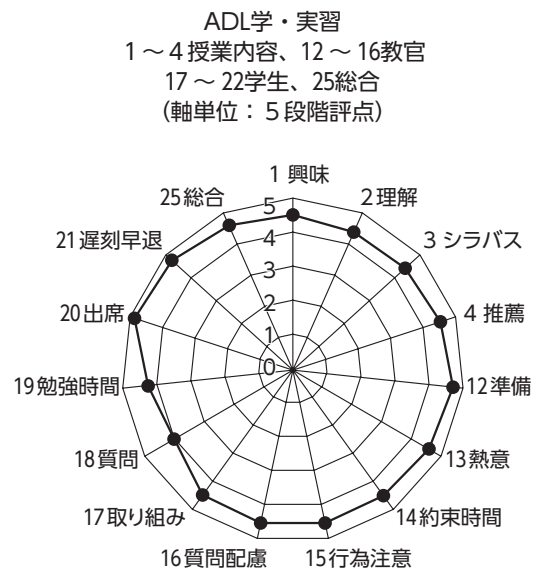
### 授業評価結果の考察と改善策

2010年度においては小さめであったグラフが大きくなった。これは学生の質の違いによるものが一要因としてあると考える。2011年度の学生は、比較的眞面目に言われたことに取組む傾向があったためではないか。その他、授業態度も成績評価に反映させるようにしたこと、グループワーク期間中でも教科担当が積極的に様子を見に行き疑問解決しやすい雰囲気を作ったこと、考えさせるように常に疑問を投げかけていたこと等で一方向の授業にならず学生とも比

較的コミュニケーションがとれていたためではないかと考える。また、今回の授業の工夫は他の授業では取り入れられていない方法であるためと考える。

改善点として2011年度も早口である点があがっていた。学生には、早口のため授業についていけないようなら、それを随時指摘するように約束してある。しかし、指摘をするのはいつも決まった学生であり、授業評価アンケートに指摘する学生は授業中にそれを指摘もせず質問にも来ない者と考えている。それは、授業に対し積極的態度とは言えないため、積極的に取組んで頂きたい。

来年度は、今回の方法を継続するとともに、もう少し実技練習時間をとれるよう時間調整をし、授業時間外での自主学習として積極的に実技練習をするようなしくみを考えていきたい。





## 実技の習得を支援する方略、模索中

かとう まゆみ  
加藤 真夕美

### 担当科目

- 身体障害作業評価学
- 身体障害作業治療学
- 身体障害作業治療学実習
- 臨床運動学
- 作業療法研究法

### プロフィール

- 学 歴：名古屋大学医療技術短期大学部作業療法学科卒業、国家資格取得（平成6年）、大学評価・学位授与機構にて学士の学位取得（平成19年）、放送大学大学院 人間発達科学プログラム在籍中
- 職 歴：川村第一病院、小山田記念温泉病院、介護老人保健施設パーム春日井、岩倉市保健センター（非常勤）での作業療法士としての勤務経験を経て、愛知医療学院に着任（平成16年～）

### 2011年度の授業概要

グラフは「身体障害作業治療学実習（2年生）」のものである。この講義では、関節可動域や筋力・知覚など、身体障害領域の作業療法評価でよく用いられる各種評価技法の実技練習とその結果の解釈を中心に学習してもらっている。

例年各評価法の実技試験を行い、すべての実技試験を通過し、かつPBL（Problem-based learning；問題基盤型学習）の課題を終了した学生に単位を認定している。

今回の授業評価は、評価技法の実技練習全10コマ分が終了した時点での評価結果である。

### 授業の工夫

- 毎回、今回はどのような内容を教授するのか、講義の概要と流れを口頭で示した。
- レジュメに評価技法の実施手順と結果の解釈例を簡潔に記し、レジュメに沿って授業を進めた。
- 「身体障害作業評価学」「身体障害作業治療学」の講義のレジュメを毎回持参するよう学生に促し、必要に応じて知識を復習しながら、知識の統合が図れるよう努めた。
- 始めに他教員や学生をモデルにデモンストレーションを行い、検査の流れのイメージをつけてもらった。

- 記録用紙のフォーマットを作成し、そこに記録してもらった。その際、検査の流れをつかんだり記録方法の学習の一助としたりしてもらえるよう、フォーマット仕様を工夫した。
- 学生の実技練習中は教員2名で会場を見回り、必要に応じて質問に答えたり助言したりした。
- 学生同士交代で評価の被検者にもなってもらうことで、検査を受ける被検者の気持ちを考えるきっかけを提供した。

## 学生評価から

「1. 興味深い内容であったか」と「2. 理解しやすい内容であったか」では、いずれも4点と5点が約半数であった。機能検査技術の習得が中心のため、「作業療法らしい」とは言えない授業構成ではあるが、それらの基礎知識の必要性を理解し、興味を抱いてくれた学生が多かったことに感謝したい。

また学生自身の取り組みについては、「18. 質問したか」は1～3点が計16%、4～5点が計84%、「19. 予習・復習の時間をとったか」は1～3点が計40%、4～5点が計60%であった。授業中に2名の教員が巡回していたので、声をかけやすい環境にあったと思われる。しかし実技試験に重点を置いているにも関わらず、十分に練習を積み重ねていない(と自己申告した)学生が多い。

学生らが多忙なカリキュラムの中でいかに自習の時間を捻出できるか、また教員がその自習にいかにつき合えるかを含め、学生らが「しっかり練習した」と自信をもって言える環境をいかに提供していけるか、が依然課題である。

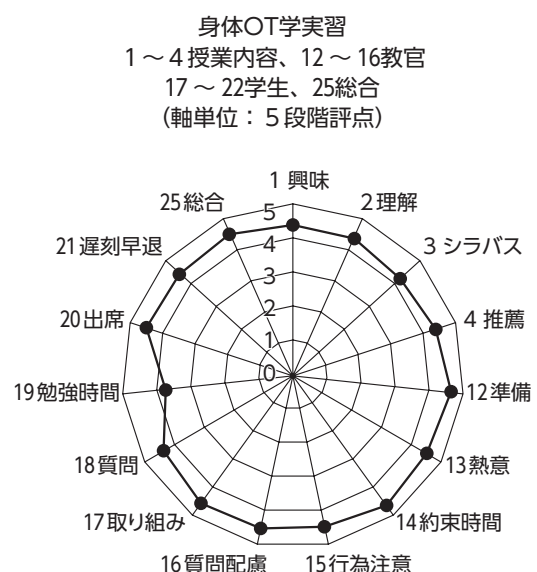
## 自由記載欄から

「先生が2人いてすぐ質問に答えてくれた」「先生が回りながら実技を教えてくれたので質

問しやすかった」などの意見が多く、学生が質問をしやすい環境は提供できていたようである。

また、「声かけや(被検者にとって)不安感のない保持の仕方も大切だと思った」「感覚の検査はとても大変で、対象者に負荷をかけるものだった」と、被検者の気持ちを酌みながら学習できた学生も多かったようである。当方のねらい通りの反応が返ってきて、嬉しいことである。評価技法の習得を通して、身体障害領域の作業療法の魅力を感じとってくれた学生も多いようである。

一方、「難しい。自分には向いていない」「身体障害領域の評価とは、数値化するもの」という印象を抱いた学生もあり、「評価技法が難しい→身障系は苦手」という悪循環に陥る学生が少なくなるような工夫が更に必要と考えさせられた。「もっと実技練習をする必要があるが、自分たちの時間の中でなかなか練習時間が取れない」という切実な声もあり、前述のごとく学生の練習時間の確保と同時に、授業時間内で「ここは確実に押さえた」と学生が達成感を得られるような授業構成の方略について、今後更に検討していきたい。



## 学生の「興味」と「理解」と「取り組み」

－2011年度 授業評価より－

きむら なほこ  
木村 菜穂子

### 担当科目

- 人体触察法実習
- 検査測定法
- 理学療法基礎治療技術論
- 地域理学療法学
- 生活環境論 等

### プロフィール

- 学 歴：名古屋大学医療学術短期大学部理学療法学科卒業(平成6年)  
日本福祉大学卒業(平成10年)  
星城大学大学院健康支援学研究科修了(平成24年)
- 職 歴：理学療法免許取得後、整形外科クリニック(平成6年～平成9年)、総合病院(平成10年～平成13年)に勤務し、平成13年4月、専門学校愛知医療学院 理学療法学科教員として入職。平成21年4月より愛知医療学院短期大学リハビリテーション学科理学療法専攻助教(現職)。

### 地域理学療法学の授業評価 ～昨年との比較～

昨年度、地域理学療法学の授業評価アンケートよりレポートを作成した。様々な反省点を見出し、少しずつではあるが改善の努力をしたが、その結果として、本年度の授業評価アンケートを振り返ってみたいと思う。

前年度に比べ、若干ではあるが学生の「興味」「理解」のポイントが高い(図参照)。もちろん、元々理学療法士を目指したきっかけなども影響すると思われるが、少子高齢化等の問題もあり、近年の社会情勢から理学療法士に求められていることを学生自身が感じ取っている可能性

もある。私自身、講義を行っていても熱心に耳を傾けてくれる学生が多かったようにも感じている。学習の始まりは「興味」であると思っているので、この結果は素直に喜ぶたい。

反面、学生の「質問」「勉強時間」のポイントは昨年と大きな変化は見られない。これは「興味」をもって講義を受講することができた結果、その時間内に「理解」が高まったため、疑問も少なく、講義以外の勉強時間が必要なかったと捉えることもできなくはないが、それよりは与えられることを素直に受け取って行く、いわゆる「受け身」の姿勢で受講した学生が多かったと考えるほうが妥当であろう。せっかく興味を持っ

てくれていたと思われるのに、自ら学ぶという「自主性」に結びつけることができなかつたのは残念であり、今後さらに取り組みを考えていかなければならないと反省する。

### 座学講義と実技講義の違い

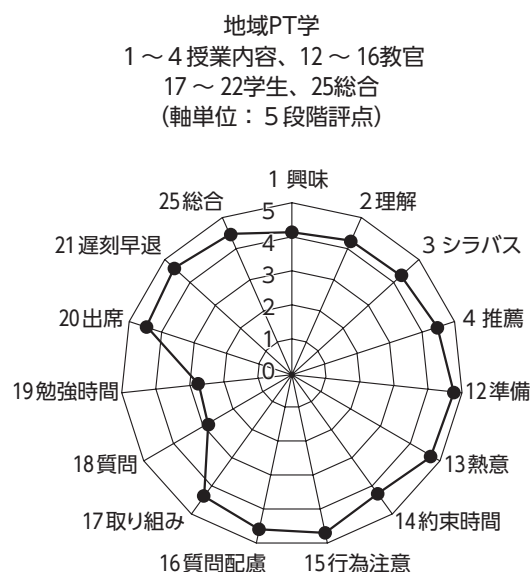
もう一点、興味深いのが座学講義と実技講義の結果の違いである。例えば、「人体触察法実習」の授業評価結果を見てみると、「興味」もあり、「取り組み」「質問」「勉強時間」のポイントが高いにもかかわらず、「理解」はかなり低い。アンケート対象の集団が違う(対象学年が違う)ため、単純に比較することはできないと思われるが、やはり実技科目であること、毎回の小テストがそのまま成績や単位取得に直結することなどが、「興味・取り組み・質問・勉強時間」のポイントの高さにつながっていると考えられる。地域理学療法学は座学ではあるが学生の興味は人体触察法実習と大きく変わらないとすると、質問や勉強時間を充実させるためには、やはり課題を定期的に出すなどが必要なのかとも思うが、ただでさえこの時期は他科目の課題も多く、学生の負担を考えると現実的には難しい。またこの取り組みに慣れてしまうと、「課題だからやる」「課題じゃないからやらない」という受け身の学習態度がさらに進んでしまう危険性も高い。

### まとめ

以上の考察から、ある程度興味を持って受講することが可能な集団であるという限定はあるが、シラバスに記載した学習目標とは別に、学生が①重要なことは講義の中で理解できる、②今、社会で起こっている講義に関連する出来事に興味を持つことができる、③自ら考え、他者にその考えを伝えることができる(口頭・文章

問わず)ということ意識し、講義を行っていきたいと考える。①が講義の中心になるのは言わずもなだが、②では講義内容に関連する社会問題、特に医療・保健・福祉の内容を中心に情報提供、問題提起を行い、それに対し学生自らがどの様に考えるかを表出する機会を増やすことで③に対応したいと考える。学生の「興味」の高さを十分な「取り組み」につなげることで、必ず「理解」が深まるはずである。

「興味」と「理解」と「取り組み」、この3点がばらばらに存在している学生も多いと思われる。これらを結ぶ手助けができるような講義の工夫をこれからも考えていきたいと思う。



## 能動的な学習の場をめざして!?

しまだ たかみち  
島田 隆道

### 担当科目

- 生命の科学
- 生物と環境
- 教養演習
- 総合演習

### プロフィール

学歴：大阪大学大学院理学研究科生理学専攻博士課程修了(理学博士、1969年)後、新潟大学医学部、山形大学医学部で環境衛生学を、名古屋短期大学で生命科学、生物と環境を学びながら教えてきました。愛知医療学院短期大学教授(現在)

専門：比較生理学、環境衛生学、生命科学、園芸福祉学、子ども環境学

所属学会：日本生化学会、日本衛生学会、日本変異原学会、子ども環境学会(理事)

資格：初級園芸福祉士(日本園芸福祉普及協会認定)、子ども環境アドバイザー(子ども環境学会認定)、高等学校教諭一級普通免許状、中学校教諭一級普通免許状。

### アンケート結果の考察と授業改善への取り組み

#### I.生物と環境

この科目は選択科目で、今年は1年生の前期に開講された。今年度の回答者はPT学生14名、OT学生17名であった。

テキストとして、帯刀益夫著「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」を活用して、私たち人類が辿ってきた種々の環境と適応について、生物としての人間の歴史を読み解き、生命科学の最先端から現代の人間観について考え、科学書を読んで、読解力、思考力、表現力を養う事を狙って進めた。レーダーチャートから、3を割った項目は、理解できない点などを質問出来なかった。予習、復習に時間を取らなかった事を示している。私としては大変興味をそそる内容であったが、文系の学生にも配慮して書かれている事が、かえって難解な内容にしてしまったようである。

#### 【学生の自由記述欄から】

ビデオと資料を活用した点は、高く評価されている。また、一場保育園の園児とのサツマイモ栽培を高く評価していた。

#### 【授業改善に向けて】

私たちの身近なところに居る生物は、知的活動への動機づけを高めるのに、素晴らしい研究対象であるので、これらの生物を活用して、科学的な思考方法と学習・実験のデザイン能力、レポートや口頭でのプレゼンテーション、ディスカッションを取り入れたコミュニケーション型の授業に変換して、学生の質問力を高め、自己表現能力を育てていくのに、有益であると思われる。

しかし、リハビリテーション養成校での「生物と環境」生物多様性を育む環境づくりについての授業構成を、絶滅していきつつある生物の保護活動にスポットを当てたが、学生の能動性を引き出すことは難しく、疑問に思っても質問する気にならないのかも知れないと感じている。

以下は一昨年度から記述しているが、来年度からは、もっと身近な教材として生物の一員である、ヒトの子どもの環境について授業を構成していきたい。なぜならば、近年、子どもたちの発達への懸念が、多くの保育者・教師や研究者から指摘されている。体力・体温の低下やアトピーの増加、気になる子と言う不可解な行動などが、いじめを受けると脳の特定の部位(扁桃核・海馬など)に傷がつく事がわかってきた。どんな子どもでも些細なきっかけから、いじめの被害者、あるいは加害者になりうる。まして、心や身体に障害があると、いじめのターゲットにされがちである。子どもたちが社会的な犯罪の被害者にも加害者にもならないように、子どもの環境を整える工夫が必要である。また、どんなに重い障害があっても、本人の自主性と主体性がしっかりと保障される場と共感的な人間関係が維持されていれば、誰でも生き生きと自信を持って地域社会で生活できる事が解ってきている。子どもの健やかな心と体の基礎作りにワークライフバランスの推進に子どもの視点を加え、子ども達の「生活の質」を向上させることが期待されている。

## II. 生命の科学

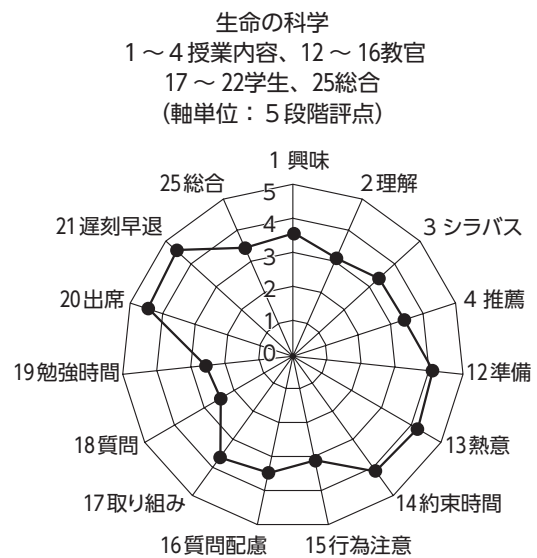
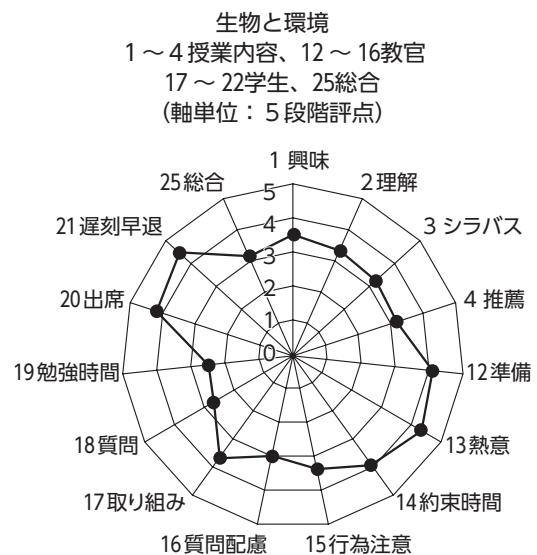
2011年度前期に開講した『生命の科学』ではテキストに「大学生物学の教科書(第3巻 分子生物学)」を使用した。回答者は77名で、授業評価では、図のように評価点3を割ったものとして、⑰学生が理解できなかったことを質問しましたか。が2.53と低かった。

これに対して今年度は、⑮学生が質問したり、意見が述べられるように配慮がなされたかは3.42であった事を考えると、こちらから質問を投げかけてみる事が、改善策につながると考えたので、来年度は質問を取り入れて行くよう努めたい。

⑱の予習、復習などの時間を取りましたかは2.61であった。授業の方針で予習はあまり期待せず授業を展開してきたが、時々課題を出して予習もするように授業を展開すれば、もっと積極的に授業に参加するようになることは、明らかである。今後この点の改善に取り組むたい。

特に高い評価を示した学生の授業出席については、月曜日の午前中ではあるが、学校へ引き付ける力はあったようである。

生命と環境の関わりを理解する事は、健康で豊かな生活を可能にする、リハビリテーション科学の探求のための基盤となるものと考えられる。



## ～家族と考える「いのち」のこと～ 2011年度「学生による授業評価」について

とりい あきひさ  
鳥居 昭久

### 担当科目

- 理学療法概論
- リハビリテーション倫理学
- 整形外科系障害理学療法治療学
- スポーツ障害理学療法学
- 理学療法特殊治療技術論
- 人体触察法実習

### プロフィール

学歴：中京大学体育学部卒業(1986)  
専門学校愛知医療学院卒業(1991)  
聖徳大学大学院児童学研究科修士  
課程修了(2005)

資格：理学療法士(教育管理、生活環境  
支援専門理学療法士)、日本体育協  
会認定アスレティックトレーナー、  
健康運動指導士、日本障害者ス  
ポーツ協会認定トレーナー、中級  
障害者スポーツ指導員

研究課題：スポーツ障害、障害者スポーツ、  
生と死の教育、信頼感と学習意欲  
など

### アンケート結果の考察と授業改善への 取り組み

リハビリテーション倫理学の評価結果は、図(レーダーチャート)で示されている(n=73)。毎年同様に思うのであるが、担当している科目の中でも授業構成が難しく、学生の関心の高さや理解度が最も興味深い科目である。

例年通り、評価項目の17,18は、学生の自主努力に関わっている項目であり、この科目の自主学習の困難さを反映している。

リハビリテーション倫理学の1年次内容は、内容を「生と死の教育」においており、毎回の

テーマに沿って課題を提示、それについての家庭学習を求めている。例えば、「死」とは何であるか?といったテーマの下に授業デザインをするのであるが、その解答を明確に示すことは不可能であり、学生も課題の中で、自分で考えただけでは、いわゆる正しい答えを導き出すのは大変難しいものである。授業評価の中でも18,19の項目がやや低い結果であったのは、このことが影響していると思われる。しかし、一方で17の項目が高いのは、困難な課題に積極的な取り組みを見せてくれているということであると解釈できる。

この科目は、学生の事前レポートや、ディスカッションを中心に授業デザインを構成している。このように、明確な解答を出すことが困難なテーマに取り組む授業であるが故に、参加する学生の反応や、授業内のディスカッションの進み方で、シラバス通りに授業が進まない事が多々あった。当科目は、明らかにされている知識を習得するだけでなく、医療、リハビリテーションの現場に於いて今なお結論づけられていない倫理的問題を検討し、その中で、それぞれの学生が医療人としての倫理観を養うことが目標の科目である。従って、今後も進行具合によっては予定通りの授業とならないことが予測される。

反省点としては、全体として行うディベートが大変苦手な学生が多く、少人数のグループでのディスカッションを多くすべきであった。毎回の課題について調査し、考える事でさえも大変であると思われ、そこに多く聴衆の前で意見を戦わせることが学生には重荷になっている様子が伺えた。新年度以降は少人数グループによるディスカッション形式を多く取り入れ、段階的にディベートを取り入れる予定である。

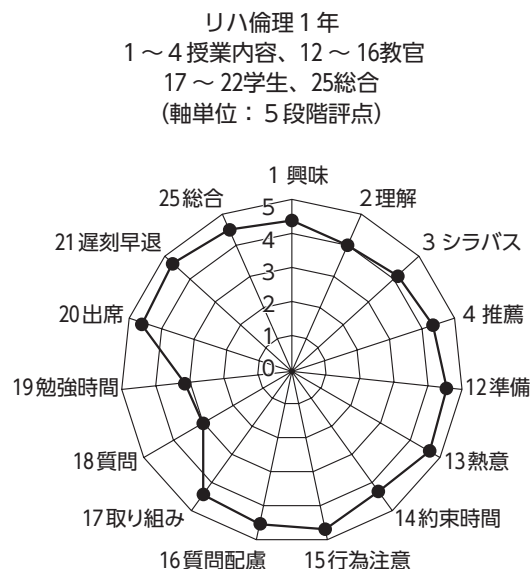
### 自由記載とそれに対する対応

この講義の特徴として、毎回の課題内容は、単に学生個人が調査し、考えるだけで終わるものではなく、必ず家庭でのディスカッションを求めている点である。自分で考え、友達と一緒に考える。昨今の学生は家族と多くのことを話し合う機会が少ない様子であり、本講義の課題について話をすることを媒介に家族コミュニケーションの一役を担うことが間接的な目的の一つに数えられるかもしれない。この形式を、私は「間接的家族参加型授業」と名付けているが、何らかのテキストや文献を用いて調査し、明確な解答を求めるだけの作業に慣れている学

生諸氏にはかなり不慣れな手法であり、改めて家族(主に両親)に様々な疑問を投げかけ、意見を交わすことも大変な事であろうと考えている。この課題に沿って話すことが、改めて親の意見を聞く機会となっていることは、必ずしも不評ではない。多くの学生から「親の意見を聞ける機会があったことはよかった」という意見が上がっており、家族とともに考える授業内容となっている。新年度も、積極的に「間接的家族参加型授業」を行う予定である。将来的には、実際に参加してもらう「直接家族参加型授業」を企画したいと思っている。

### 学生に求めるものと、自らと他教員へのメッセージ

この学校に入学した本来の目的は、将来医療従事者として臨床現場で多くの人の苦しみを救済することのはずである。本講義を通して、医療従事者としての心構え、倫理的感性を養っていただけることを期待する。





## 子どもの治療に対する興味

の は ら さ な え  
野 原 早 苗

### 担当科目

- 小児疾患系障害理学療法学
- 小児疾患系障害理学療法実習
- 保育園事業(地域理学療法実習)
- 検査測定法
- 検査測定法実習
- 臨床運動学
- 人体触察法実習

### プロフィール

平成18年、専門学校愛知医療学院理学療法学科教員として入職。  
平成21年より保育園事業として保育園年長児に対して運動教室を開始。  
平成22年より愛知医療学院短期大学リハビリテーション学科理学療法学専攻助手。  
平成23年より愛知医療学院短期大学リハビリテーション学科理学療法学専攻助教。

### はじめに

小児の分野は毎年のことだが、学生に、苦手意識が強く乳児そのものと小児の治療イメージがつかないといわれる。今年度も、授業開始前に保育園事業で5歳児と関わりを持ち子どものイメージを少し持ったうえで、授業に臨めるようになっている。つまり、子どもに接した事がないという理由での苦手意識は少ないと考える。しかし、授業では胎児期・新生児期・乳児期の正常発達が中心であり、5歳児と関わりがあってもイメージできないのは、同じである。

### 授業を進めて

今年度は昨年度同様、パワーポイントでのイラストを多く使用し、項目の要点を絞り学生がめいめいに書き取っていく形式にした。同時に例年同様、保育園事業で関わった子ども達の話を引き合いに出し、ビデオ視聴や赤ちゃんの人形を実際に使用し映像とイメージをさらに植え付けて説明をした。昨年よりは学生の質問や反応が良く感じ、小児分野に興味のない学生の興味を少し引き出せたように感じた。また、授業内容に合わせて実際にできる場面は体感しながら進めていき、子どもの正常発達を知るという

よりは自身が日常的に無意識で行っている動作の確認の場となっている。生活様式が変わり、日常的に行っていない動作が頭の中でイメージできない学生が増えているように感じる。正常発達の動作確認や治療的な話の中でのセラピストの身体の使い方の実習を行い、自身の身体の使い方や姿勢の説明をするが、実際に姿勢が実現できない場面が多く治療に対するセラピストの姿勢を取る事自体が難しい学生が多く、なかなか治療実習に至らなかった。しかし、自身の治療姿勢を学んでいるうちに、実際の小児の治療にも興味が広がったように感じられた。

### 授業評価の結果を見て

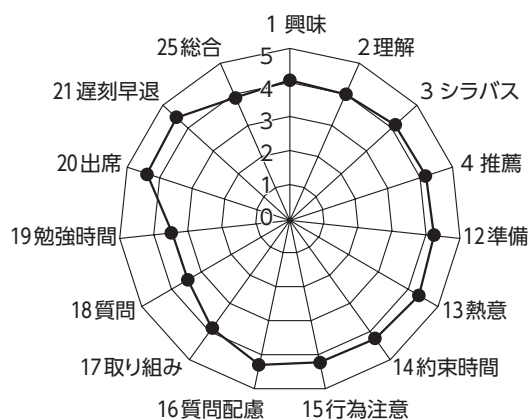
昨年同様、学生の勉強時間や質問の項目が低く興味の低さが共通するよう思えるが、取り組みの部分が増えている。また、学生の受け身の姿勢が強いのは例年通りだが、今年は一部の学生の質問に対し全員が興味を持ち聞く姿勢がみられた。授業中は受け身の姿勢が強いが、学生からの質問に対しては興味を持って聞く姿勢が見られたので、昨年のグラフと比較しても興味をもって授業に臨んでいる事が考えられる。事前に保育園事業で5歳児と接する機会があった為、イメージのわからない知らないものに対するという苦手意識は薄らいでいたと考える。

### 今後について

授業前に保育園事業で5歳児に関わる機会があり子どもに接した事がないという苦手意識を取り除く事ができ、授業につながったように考えられる。そして、小児治療場面などのイメージのない事柄に対する説明や実際に治療姿勢を経験することで、自身の身体イメージを持たせ、それを知識として受け入れる事ができるかがま

だまだ課題である。多くの学生が進む成人分野の世界へ小児分野の知識がいかに大切で成人の治療を行っていく上でどうつなげていくかを伝えることも今後への課題である。

小児PT学実習  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)



## 臨床での問題解決に 結び付けられる学習を目指して

はら かずこ  
原 和子

### 担当科目

- 義肢装具学
- 義肢装具学実習(作業療法学専攻)

### プロフィール

- 1967 国立身体障害センター作業療法士
- 1971 東京都補装具研究所吏員
- 1974 神奈川県総合リハビリテーションセンター作業療法士
- 1985 名古屋大学医療技術短期大学部、医学部保健学科(1997) 作業療法学専攻助教授、名古屋大学大学院医学系研究科(2002) 助教授
- 2005 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学、大学院リハビリテーション科学研究科(2006) リハビリテーション科学専攻教授
- 2009 愛知医療学院短期大学リハビリテーション学科教授

### 授業内容

興味、理解しやすさ、シラバス、後輩への推薦は概ね良好であった。

### 授業担当者

概ね評価はそろっていた。

### 授業態度

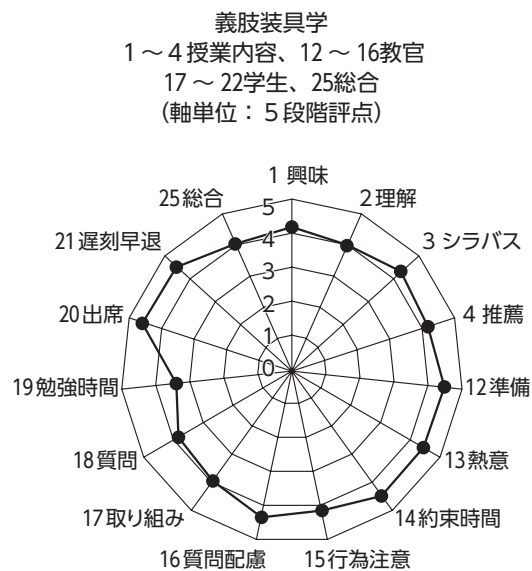
熱心に取り組み、出席率も大変良好で、遅刻早退も少なかった。予習、復習がもう少しできれば良かった。

### 総合評価

全体に偏りのない、良い評価であり、学生の積極的な学習ができた。

## まとめ

PBL(問題解決型学習)を時間の許す限り実施した。その目的は、義肢装具学の考え方を、医学モデルから作業遂行モデルまで統合するためである。自ら選択した作業、価値を感じた作業、興味があり、魅せられた作業に従事する時、人間は自らの治癒力、延命力を上げると言われているが、義肢装具の治療的利用がそれらを支援するリハビリテーションプログラムであることにつなげられる様、授業の内容を誠意努力した。学生はその期待に答えてくれたと言える。



## 1年生での実習課題とレポート作成

はやし  
林

しゅうじ  
修司

### 担当科目

- 人体解剖触察法実習
- 検査測定法
- 運動学実習

### プロフィール

1967年生。愛知大学法経学部経営学科卒業。国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院卒業。1997年4月～2003年3月、和田内科病院リハビリテーション科勤務。2003年4月～現職。

### 実習概要

教員が事前に用意した6項目の実習課題に対して、各グループ(6班)がデータを収集・分析し、1週間でレポート作成し提出する。提出レポートについては教員が添削し、必要ならば、再提出を義務づけた。実習最終日には、各グループに実習課題の発表会を設け、学生・教員が内容の審査員になり、採点した。実習点(50%)・筆記試験(50%)で総合判定した。実習の到達目標としては、①実習課題に従い、データを収集・分析し、書式に則り、レポート作成できる、②文献検索できる、③分かりやすく発表ができることとした。

### 総評

総合評価が4.2と概ね良好な評価が得られた。

### 問題点

実習課題のレポート作成(グループレポート)において、グループ内で積極的に取り組む学生とそうでない学生の差異が著明であった。レポート作成を期限内に完成するため、各実習課題を項目別に分担したグループがほとんどであった。筆記試験出題範囲は全ての実習課題であるにもかかわらず、レポート作成に全くタッチしていない学生が見受けられた。レーダーチャートからは、読み取ることができないのだが、筆記試験の再試験者数及び不合格者数が目立って多かった。

## 考察

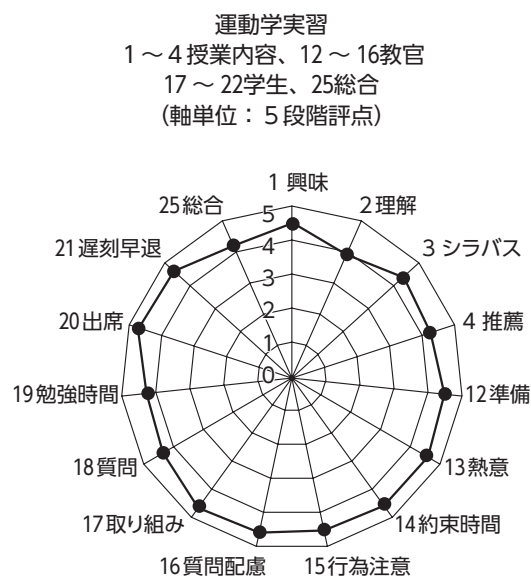
実習科目は、良好な評価が得られるという印象がある。おそらく、「臨床」という実践の場に直結したテクニックが得られることで、学生の興味が、座学の講義よりもてるのではないだろうか。また、教員と学生との「距離感」が近く、質問しやすい環境にあるのもその一因であるかもしれない。しかし、学生の自由記載のアンケート結果にもあったように、「積極的に取り組む学生」と「ほとんど人任せの学生」と二分されてしまうことが生じやすい。積極的な学生は、レポート作成等で教員と密にコンタクトをとる学生で、回数を重ねるたびに、自ずと実習課題に対する理解度が増していく。人任せの学生は、その逆の現象が起き、両者の学習効果は益々乖離していく。

## 改善策

当校で学生は1・3年生で臨床実習を体験する。その中心課題として「レポート作成」は必須のものとなる。学習目標は、臨床実習レポートの予行練習として位置づけた。ある程度予想はしていたが、学生はグループ単位でのレポートであったにもかかわらず、作成に忙殺され「紙幅を埋める、作業的なレポート作成」に終始してしまっていた。その結果が、筆記試験に反映された。また、後期の終盤で、他教科の科目試験と重なるスケジュールのタイトさが、消化不良を引き起こしたことも要因になっているのかもしれない。改善策としては、理想的にはグループレポートではなく「個人レポート」を課すことが、betterであろう。しかし、レポート添削する教員側の負担が重くのしかかり、マンパワー的に現状では厳しい。前期の段階で、ごく限定された課題についてのレポート作成を試みるのも一案かもしれない。(しかし、レポート添削については、一教員に負担が集中しないように各教員との協力体制、工夫が必要になってくる。)アンケート自由記載では「レポート作成、パワー

ポイントの操作を学ぶことができてためになった」「実習課題が大変であったが、理解が深まった」「理解度を見直す良い機会となった」「文献検索が身に着いた」など、おおよそ肯定的な意見が多かった。おそらく、受動的になりがちな座学の「講義」に対して、「実習」講義はデータを収集し、レポートを作成するという能動的作業抜きでは成立しない。ほとんどの学生にとっての初めての体験であるがゆえに困難なものであったが、その有意義性については理解しているようである。

また講義の開催時期について「時期尚早なのではないだろうか」との意見があった。確かに一理ある意見である。専門学校時代では、2年時の前期に設定されていたように記憶している。当校1年時では、「運動学・解剖学・生理学」のいわゆる「基礎科目」の講義が終了していない。その時点で、応用力の求められる当該科目の講義を設定するのは、やや学生に酷であるかもしれない。改善策について具体的に提示できないが、学生を要所要所でサポートし、学生にとって有意義かつ充実感のある科目にするため、試行錯誤していくつもりである。



## 理解し易い講義を工夫

ふなはし ひろおみ  
舟橋 啓臣

### 担当科目

- 一般臨床医学
- 安全管理学
- 救急感染対処論
- 内科学

### プロフィール

1969 名古屋大学医学部卒業  
1979 名古屋大学第二外科 助教  
1987 // 講師  
2003 // 准教授  
2005 岐阜県立多治見病院 院長  
2010 // 名誉院長  
2011 愛知医療学院短期大学 学長

〈今回は一般臨床医学に関するレポートとした。〉

### 授業評価結果について

1から17の設問に対するアンケート結果はまあまあであった。しかし、18の理解出来ない部分について質問が出来たか、19の自分の勉強時間についてはあまり良い評価ではなかった。しかし、この2つの点は授業に対する評価ではなく、学生自身の問題であるように思う。大学入学後の初年度に一般臨床医学に取り組むことは、講義に使われる用語の一つ一つが目新しく、内容を正しく理解することが困難であったと思われる。したがって、かなり噛み砕き、何度も同じ用語を説明するよう心掛けてきた。

### 今後の講義方法について

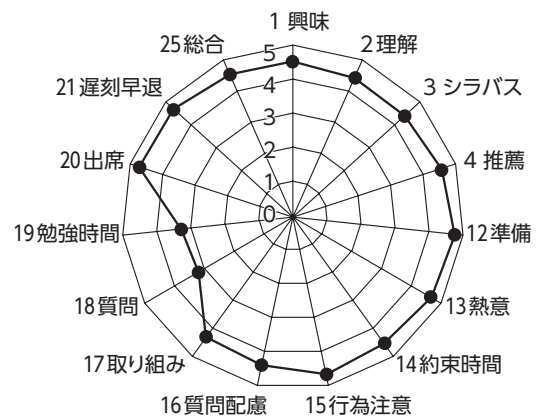
アンケート結果からの判断では、講義方法については概ねこれで良いと思われる。内容が豊富であることから、全体を詳しく理解させようとするあまり、細かな説明を続けるとかえって難解な講義となってしまうため、今回と同様な方法で講義をすることで問題ないと判断した。

### 学生のやる気について

1学年の学生は、これまでの高校での学習に比べ、耳にしたことがないような用語が次々に現れ、理解する上で頭の中で整理がつかず放棄

してしまうことにもなりかねない。最終的に卒業して国家資格を得る上で、1年時の講義内容をずっと知識として確保することは困難である。したがって、学生のやる気を削がないためにも、できるだけ平易な内容に噛み砕いて講義をし、最終段階で再び勉強する際に、そういえば講義で聞いた覚えがあるな、という記憶にとどめるくらいでも構わないように思う。

一般臨床医学  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)





## 学生授業評価結果からみた講義の課題 ～個々の学習ニーズに合わせた講義を行うためには？～

ほりべ やすよ  
堀部 恭代

### 担当科目

- 作業療法評価法(レーダーチャート作成)
- 地域作業療法学
- 職業関連活動

### プロフィール

学歴：専門学校愛知医療学院作業療法学  
科卒業(2000)  
聖隷クリストファー大学大学院前  
期課程修了(2011)  
研究課題：訪問作業療法の実践プロセス  
所属学会：(社)日本作業療法学会  
日本作業科学研究会  
日本職業リハビリテーション学会

### 1. はじめに

昨年度の学生授業評価の振り返りから、学生の個々のニーズ・興味・関心に合わせた講義の進め方について検討していく必要があることが分かった。

今回、2011年度に担当した作業療法評価法講義(以下、講義とする)において、学生の個々のニーズ・興味・関心に合わせた講義となるよう検討し取り組んだ。

学生授業評価(n=25)の選択記述をレーダーチャート(資料1)にまとめ、自由記述を表にまとめた(資料2)。これらの資料より講義の振り返りを進め、課題を考察する。

### 2. 講義について

今回の講義における取り組みにどのような課題があるかを考察する為に、講義の対象となる学生の特徴と、講義の進め方について述べる。

#### (1)対象となる学生の特徴

学生は作業療法評価を学ぶ上で、検査・測定等の方法論にとらわれやすく、評価の視点についての理解が進みにくいように思われる。また、明確な答えを求め、自分の意見を持つとしない傾向がある。

#### (2)講義の進め方

教科書に書かれものを「答え」として解釈する学生が多いため、講義は教科書に頼らず、教員の問いに対してグループ内で検討する機会を多く設け、学生同士が自らの意見を交換する場とした。その際に、常に決まった答えはなく、様々な文献や他者との意見交換を積極的に行いながら自分の意見を模索するよう繰り返し伝えた。

また、“バレンタインデーに好きな人にプレゼントを渡す際に必要な情報(評価)はなにか”などの問いかけをし、評価について身近

に感じ、学生が自分でも考えられそうと思えるよう工夫をした。

講義後には振り返りシート(①新しく発見できたこと②いまいち分からなかったこと③知りたいこと④感想)への記入を求め、②については次の講義で解説をした。

### 3. 学生授業評価結果

授業評価において低評価であった項目は「理解」「シラバス」「勉強時間」であり、自由記載では「もう少しじっくりと学びたい」という意見があった。高評価であった項目は「準備」「質問考慮」であり、自由記載では「他者の意見が聞けた」「質問しやすい」「質問紙に書いたところを次回説明してくれた」という意見があった。

### 4. 学生授業評価結果からみた講義の課題

#### (1)「理解」が低評価である理由について

講義ではグループ内で話し合う機会を多く設け、自分の意見を持つことを求めたが、学生からは「難しい」「分からない」などの声が聞かれた。そのような声に対し、教科書を用いず、具体例を挙げ説明を重ねたが、その方法では不十分であったことが考えられる。説明をする際に教科書を用い、一つの考え方を示すことも有効な手段であるかもしれない。今後の講義において、教科書の有効的な活用法についても検討することが必要と思われる。

また、学生たちの「難しい」「分からない」にただ教員が応えていくのではなく、学生自身が課題を解決できる支援方法の模索も必要と考える。

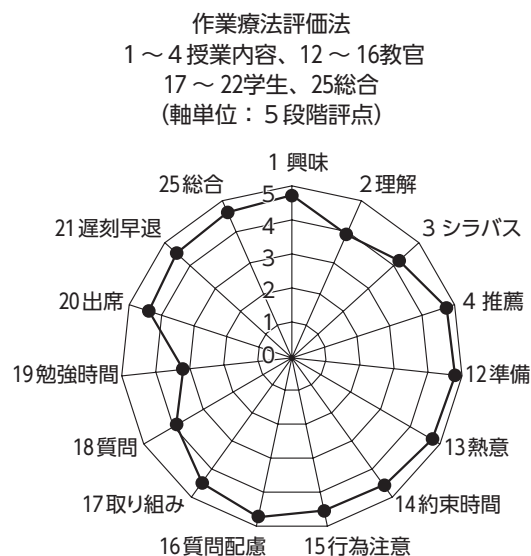
#### (2)「シラバス」が低評価である理由について

講義では、学生個々のニーズ・興味・関心に合わせた講義となるよう、振り返りシートを用い、その内容に合わせて講義を進めた。しかしその結果、想像していた以上に学生からの質問や要望が多く、当初予定していた講義内容を変更せざるを得なくなった。

背景には、到達目標の吟味が不十分で、多くのことを伝えようとしていたことがあると思われる。今後、同じような形式で講義を行う際には、到達目標を吟味し、余裕をもたせた授業計画を立案する工夫が必要であると思われる。

また、学生によっては、振り返りシートに自分の意見を述べられない者もあり、振り返りシートのあり方についても検討していくことが必要と考える。

資料1：レーダーチャート(作業療法評価法)



資料2：アンケート内容の詳細(作業療法評価法)

講義の感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>考えれば考えるほど分からなくなる</li> <li>作業に関する見方が変わる</li> <li>楽しかった</li> <li>難しかったが、興味を持てた</li> </ul>
よかったと思う点	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者の考えが聞けて良かった</li> <li>質問しやすかった</li> <li>質問紙に書いたことを次回の講義で説明していたところ</li> </ul>
改善すべき点	<ul style="list-style-type: none"> <li>もう少しじっくりと学びたい</li> </ul>

## 基礎知識の理解と自己学習への発展

まつむら ひとみ  
松村 仁実

### 担当科目

- 中枢神経系理学療法治療学実習
- 運動学実習
- 人体触察法実習
- 運動療法総論

### プロフィール

2005年度入職。現在、1週間のうち1回の臨床(病院勤務)での研修を行う。担当科目は専門基礎科目、専門科目であり、講義、実習授業とその補助を行う。

### 1. 2011年度担当授業

今回担当した運動療法総論のアンケート結果を考察する。この科目は、専門科目であり1年生の後期に開講された。前期から開講されている解剖学・生理学・運動学などの基礎知識をベースにして理学療法実施のための基礎になる講義である。そのため、運動療法の基礎的知識習得に加え、本学に入学してから学んできたことの復習とその知識をどのように活かして、さらに専門的な知識や技術修得に向けどのようにつながっているかを理解し、学生自身で考えるきっかけにつなげられるようにすることも本講義の課題であると考えた。

講義はパワーポイントを使用し、前回授業の確認のため小テストを実施し、その確認をしつこく行い、基礎の段階で落ちこぼれないよう進めたつもりである。

### 2. 授業評価結果

授業内容の項目はすべて4点台であった。その中で学生の授業態度の項目である「質問できたか」「予習、復習の時間をとったか」の2項目の評価点が他の項目に比べ低い結果となった。

自由記述では、パワーポイントを使用したことについて分かりやすかったと評価する学生がいる一方、「スライドを変えるスピードの速さ

についていけない」、「文字が小さいと見づらい」、「穴埋めのプリントを配布して欲しい」との意見も多数見られた。また、「質問のしやすさ」や「基礎知識とのつながりが分かった」といった意見も見られ、こちらの意図したことが実践できたと考えられる。

### 3. 授業評価に基づく改善策

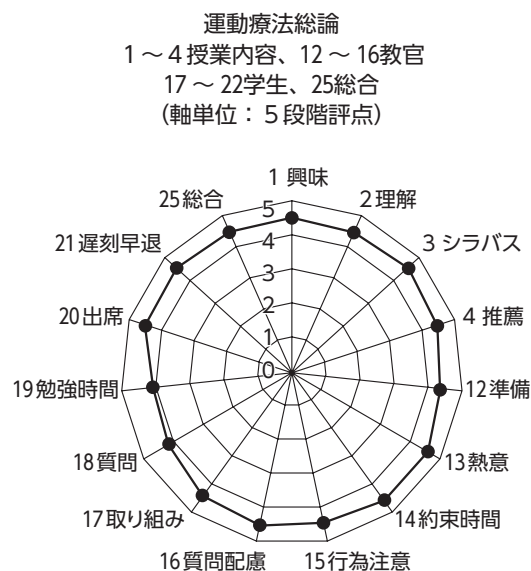
パワーポイントを使用して講義を進めていたため、こちらが板書する時間を減らすことができ、また流れに沿った展開ができたため、理解しやすさという点ではよかったと思う。逆に、パワーポイントではそれなりのスピードで展開する。そのため学生は、書き写すことに専念しスライドの移行が速いことや話を聞きそびれたりということが起こったと考えられる。一枚のスライドで伝える情報量の調整が必要であり、また書き写す際もポイントが示せるような作成を検討していきたい。また、プリントの配布に関しても検討していきたい。

基礎的な知識の理解が不十分であると、本講義も含め今後の授業にも影響があると考えたため、かなり基礎的な部分に力を注いだ。「復習になった」、「基礎を深めることができた」、「基礎をどのように応用するか分かった」との意見も見られたが、ある程度理解ができている学生にとっては、あまり面白みを感じない講義になってしまったのではないかと心配もある。その点においては、ある程度理解が進んでいる学生に対して、自己学習を進めやすくするような課題の提示が今後の課題である。

### 4. その他

ここ数年間で私が感じることとして、学生の学力低下や学習の仕方を知らないことである。また、学習に対しての取り組みとして、言われたことだけを詰め込んでいく受身的な姿勢である。

本来は、自分で考え身につけていくべきものであると思うが、現状ではかなり困難と思われる。学習に対する態度や自ら質問する、授業中に質問できる能力養成も、これからの教員の役割の一つになっていると考えられる。学生の個別性があるが、授業の中でも幅広い課題の設定や質問などの投げかけにより、自己学習に至るまでの適度な援助が課題と考えている。



## 改善したのは私？ 学生？

まんざい と も こ  
万歳 登茂子

### 担当科目

- リハビリテーション医学概論
- 公衆衛生学
- 整形外科学

### プロフィール

1972年名古屋市立大学医学部卒業。専門はリハビリテーション医学、整形外科学で、本学には1989年より非常勤講師として講義を担当しています。

名古屋市児童福祉センター→名古屋市総合リハビリテーションセンター→和田内科病院→サニーサイドホスピタル という職歴は、小児→成人→高齢者→回復期リハビリテーション というすべての分野に関わってきたことです。その中でも小児リハビリテーションと高次脳機能障害は私のライフワークです。

### 2011年度授業評価アンケート結果と考察

2009年度の授業評価レポートのテーマは「丸いレーダー・チャートにご協力を」

2010年度の授業評価レポートのテーマは「どうしたら丸いレーダー・チャートになる？」

2011年度のテーマは「改善したのは私？ 学生？」にしました。

今年度はかなり丸に近い大き目のレーダー・チャートになりました。

それも1年生のリハビリテーション医学概論も公衆衛生学も、2年生の整形外科学もともに改善しました。

私も板書の書き方や話すスピードに注意する

ようになりました。配布するプリントも改善しました。しかし根本的には大きな変化はなく、私の講義の基本理念は学生に理解し易い講義、ポイントを押さえた講義です。

今までの私の悩みは、「予習・復習の勉強時間をとったか」、「理解できない点を質問したか」の部分がへこんだチャートでした。リハビリテーション医学概論はまだまですが、整形外科学はここが改善しました。すなわち学生が勉強し質問したという事です。

うれしいことです。リハビリテーション医学概論は基礎と臨床の橋渡しの役割を持つ講義と考えていますから、解剖学や運動学、生理学

などをしっかり勉強し、質問してくれれば問題ありません。

公衆衛生学では、予習、復習などの時間をとる必要ない講義内容にしました。すなわち新聞やTVやnetを通して絶えず新しい社会情勢を吸収し、それを理解し自分の考えとしてまとめれば講義内容でした。

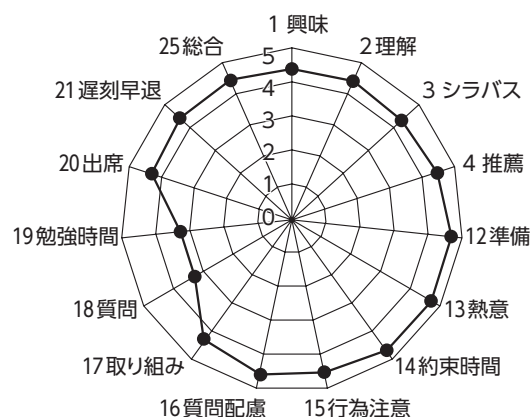
2年生の整形外科学でこの2点が改善したことは学生の努力だと思います。ご協力ありがとうございました。

## 今後に向けて

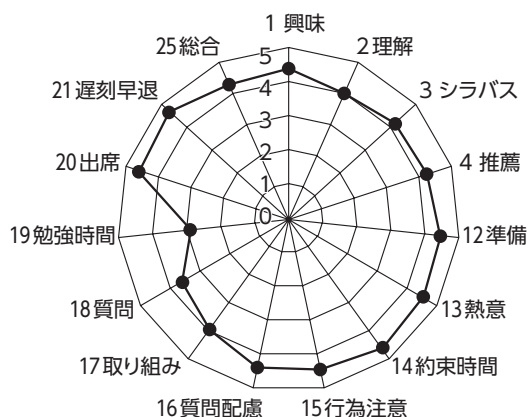
自由記載では全ての講義において「臨床の話を取り入れた講義内容が多く解り易かった」「臨床の話聞いてもっと勉強しなければと思った」などの記載が多く、これからもこのスタイルを続けて行こうと思っています。

パワーポイントを使つての講義は、ディスプレイ画面がやや小さく見づらいとの指摘もあります。しかしこれはハード面の問題ですので、これを補うために何か工夫をしていけたらと考えています。

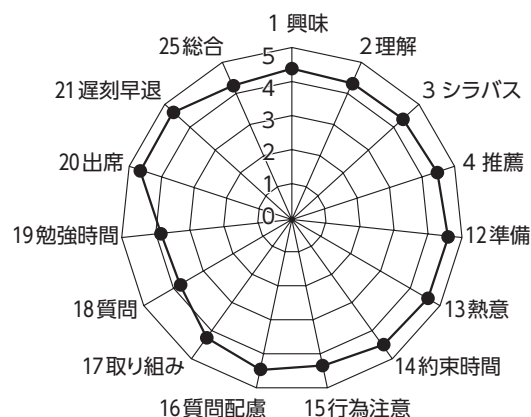
公衆衛生学  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)



リハビリテーション医学概論  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)



整形外科学  
1～4 授業内容、12～16教官  
17～22学生、25総合  
(軸単位：5段階評点)



## 試行錯誤の4年目

～2011年度の学生評価について

みやづ ますみ  
宮津 真寿美

### 担当科目

- 運動学(総論)
- 内部疾患系障害理学療法治療学
- 内部疾患系障害理学療法治療学実習
- 運動学実習(理学・作業療法学専攻)
- 理学療法研究法
- 臨床運動・生理学
- 運動器系障害リハビリテーション論
- 内部疾患系障害リハビリテーション論

### プロフィール

学歴：放送大学教養学部卒業(1999)  
専門：基礎理学療法学、筋肉生理学  
研究課題：理学療法による骨格筋の機能改善  
所属学会：理学療法士協会、理学療法の医学的基礎研究会、日本生理学会、生理学女性研究者の会  
著書：系統別・治療手技の展開 改訂第2版 2007 協同医書出版社、筋機能改善の理学療法とそのメカニズム 2007 ナップ

### 学生による授業評価

運動学(総論)の授業評価を中心に述べる。平均すると4ポイント以上の評価項目が多いが、4ポイントより低いのが、17：質問、18：勉強時間の項目である(図参照)。自由コメントでは、良い点として、「解剖・生理学の知識の後でよく理解できた」、「他の教科で分からなかったことも理解することができた」、「毎回の小テストで理解が深められた」、「プリントの説明がわかりやすかった」、「スライドとプリントで説明してくれたこと」、「ビデオをみることができた」、「スライド(プリント)がわかりやすい」、「すべてが大切なことだと授業を受けて思った」、「質問に丁寧に答えてくれた」、「雰囲気づくり」、「面白かった」、「興味深かった」、悪い点として、「スライドの示す点が小さすぎてみにくい」、「プリ

ントの文字が小さい」、「難しかった」、「内容を詳しくしてほしい」、「自由席でなくても良い」との記載があった。「一番講義でよかった」、「楽しかった」と書いてくれる学生もあり、うれしいことだった。

### 担当教員としての応答

17：質問、18：勉強時間の項目の点数が低いので、学生から質問しやすいよう、また、勉強するような動機付けをするべきである。授業中、質問の有無を聞いているが、この学年は、レスポンスが乏しく、質問者が、ほとんどいなかった。質問用紙を配布し記入させるという方法もあるが、わからなかったら、その場で聞く態度を身につけることも大事だと考えており、質問しやすい環境作りを整えたい。

パワーポイントによるスライドでの授業や、スライドの資料配布が良いとのコメントが多数ある。スライドをそのまま配布資料にすると、文献からの図表などは、大変見づらくなる。以前は、A4に2×3スライドの配布資料だったが、配布資料の見づらさを改善するため、2×2スライドの配布資料にした(ただ、こうすると、配付資料の枚数が当然増える。つまり紙代がかかる)。それでも、見づらさをコメントに書く学生がいる。授業内で、プリントの文字が見にくかったら、授業中にプリント書き入れるよう話している。それでも、文字が小さいとコメントに書くのは、授業中プリントにノートすることをせず、テスト前に見て小さくて読めない、とコメントしているからだと思われる。

スライドの文字が見にくいとのコメントがある。スライドの文字はできるだけ大きくするように心がけている。おそらく、図の中の文字が小さいのだと思う。多目的室のモニターが小さく、学校として、ハード面の改善を進める必要があるが、見えないのなら、その場で学生側から質問・意見してほしいと思う。実際、本当に知りたい学生は、授業後に聞きに来る。

## 日常の授業で行っている工夫

運動学は、入学直後の1年前期の開講で、学生は、大学の授業の進行に戸惑いがある。大学授業に慣れることや、他の科目の重要性も折に触れて話している。

2、3年前より、授業開始1～4講くらいまで、ビデオ学習を行っている。1本目は、NHKスペシャル「骨と筋肉の連携」、2本目は「随意運動のしくみ」である。講義の初めに、ざっくりと運動のしくみを理解してほしいからである。2本目は、ただ見るだけでなく、難しそうな箇所はいったんビデオを止めて、解説を加えている。その結果、全部見るのに時間がかかるようになってきているが、理解がしやすくなったのではないかと思う。学生からの評価も良い。近年の学生には視覚的な教材をうまく利用した方が良いかもしれない。

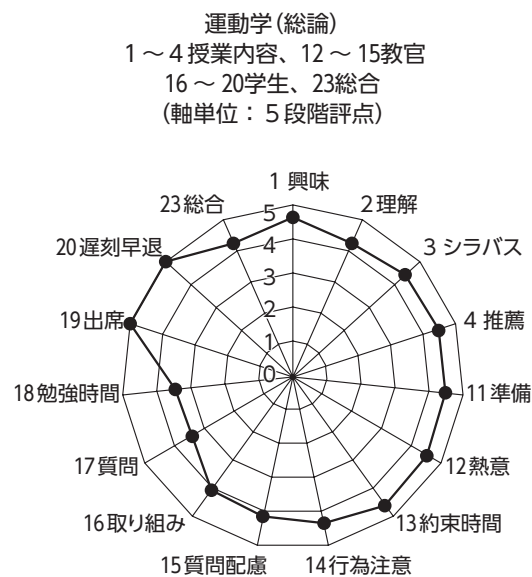
ビデオ学習が終わると、スライドでの授業を開始し、次の授業で、前回授業の重要な語句の

小テストを行い、スモールステップでの知識の習得に努めている。小テストのことを学生に話すと、「エー!!」と反論の声が挙がるが、授業評価をみると、良かったとする学生が多く、否定的な評価はない。教員からすると、毎週、90人近くの学生のテストを採点し、一覧にするのは、大変な労力である。ただ、学生からの評価が良好であるため、頑張っって継続していく。

また、時々、授業内容と関連している国試問題を演習問題として、学生に解答させている。今学んでいる知識習得の重要性を知ってもらうためである。

## その他

興味深く、アカデミックな授業にしたいという理想がある。学生の能力が、幅広く、「この授業が楽しい」、「おもしろい」、「もっと詳しい内容が知りたい」と思う学生もいれば、「難しいと思う学生がいる。そんな中で、まずは基本的なことを確実に修得してほしいし、あまり、難しいことを講義しても学生が理解できないというあきらめがあり、スライドの枚数としては、年々、厳選して減らしている。よって、理想にはほど遠く、まだまだ試行錯誤の状態である。





## 学生が体験することを通して得られるもの —講義科目と実習科目の比較を通して—

やました ひでみ  
山下 英美

### 担当科目

- 運動学
- 運動学実習
- 基礎作業学
- 基礎作業学実習
- 作業療法治療学概論実習
- 精神障害作業治療学実習
- 老年期作業療法学
- 地域作業療法学実習

### プロフィール

学歴：日本福祉大学福祉経営学部医療福祉マネジメント学科卒業  
名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士前期課程修了  
専門：老年期作業療法・認知症に対する作業療法  
研究課題：認知症の非言語的コミュニケーションリハビリテーション  
「個」と「関係性」から見た自我同一性の発達  
学習方略の教授と使用の促しによる学習支援  
所属学会：日本教育心理学会・日本認知症ケア学会

### 講義科目(運動学)の授業評価結果のまとめと昨年度との比較

今年度のアンケート結果はおおむね4点台となったが、「質問」「勉強時間」で3点台となり、昨年度とほぼ同様の結果であった(図1参照)。自由記載についても、プリントや模型の使用に関して、昨年同様高評価を得た。

一昨年度は「理解」の得点が低かったため、昨年度から引き続き、授業前に前回の範囲の小テストを実施した。穴埋め式にすることで、学生の誤り方をつかむことができ、前回の授業のどこでつまづいたのかが把握できた。典型的な誤りについては全体へフィードバックし、特に理解の

不十分な学生が多い場合は、その部分の復習から始めるようにした。その結果、「理解」については、昨年同様の結果となっていると考えられる。

しかし、依然として「質問」の得点が低い状態が続いている。どこが分からないのかが分からない状態の学生、またその逆で、分かったつもりでいる学生も多いのではないかと考えられる。学習中に自分が理解しているかどうかを意識して取り組むこと、すなわち自己モニタリング方略を使用することは、学習効果を高めるが、それを行うには、進行中の課題から離れて振り返ってみる必要がある。また、他者に説明することができてはじめて理解できたと言える。このよ

うに学生自らが能動的に行動することを通して、自らの理解の程度を知ることが、次の学習につながると言える。講義形式の授業の中で、教員側がそのような機会を意図的に作っていく事が、学生の理解を深めるために重要であると言える。

### 実習科目(地域作業療法学実習)の授業評価結果のまとめ

今年度は、地域作業療法学実習の中に、保育園事業の一環として製作教室の計画・実施を組み込んだ。この科目に対するアンケート結果は4.35～4.94と高評価を得た(図2参照)。

自由記載には「体験を通して学ぶ事が多かった」「実践的で力になった」「達成感があった」「面白い授業だった」「成長できた」等がみられた。また、計画性・人と関わる際に大切なこと・先を見る事の大切さ・段階付けを学ぶことができたとの記載もあった。

この科目では、学生が計画・準備・実施・振り返りという一連の流れを能動的に体験し、その過程に教員が関わることによって、学生自身が分かっていること・分からないことを意識化することができたと言える。そしてそれを元に学生が行動を起こし、そこからまたフィードバックを得ることを繰り返すことによって、学習が進んで行ったと考えられる。しかし、「授業外でやるべき事が多く、大変であった」「負担が大きかった」との記載もあり、学生への負担が大きかったことは否めない。

### 今後に向けて

学生が体験することによって得られるものは多岐にわたると考えられるが、今回は特に体験することによって、自らの理解の程度を知ることが可能であるということに着目した。その際の教員の関わりは、学生の気付きを言語化することを支援したり、学生の思考を整理するため

の問いを与える事であろう。実習科目はもちろん、講義科目であっても、グループで説明の機会を設けたり、自分で問題を作成させる等、能動的な学習を必要とする課題を組み込み、自らの感覚を元に学習を進めていける学習者を育成していきたいと考えている。

図1

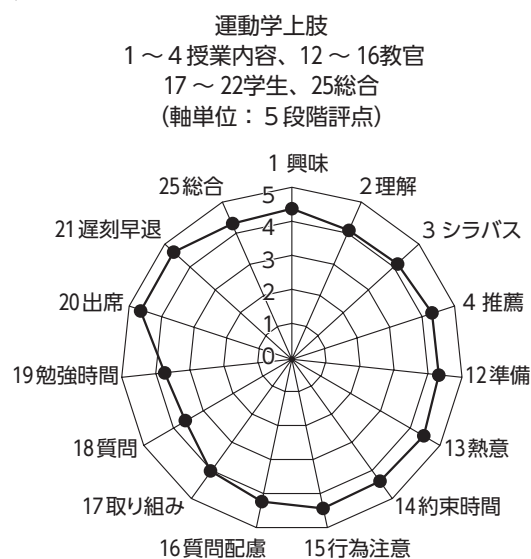
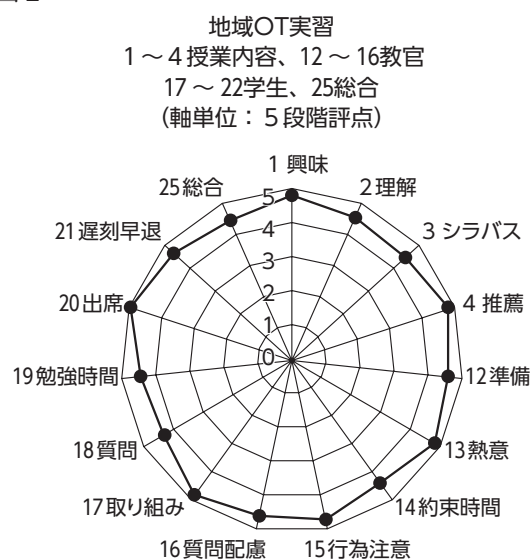


図2



## 面接評価実践による授業

～作業療法評価法実習の経験を通して～

よこやま  
横山

つよし  
剛

### 担当科目

- 精神障害作業評価学
- 精神障害作業治療学
- 精神障害作業治療学実習
- 作業療法評価法実習
- 作業療法概論(精神障害領域)
- 基礎作業学実習(木工)
- 作業療法治療学概論実習(グループワークモデル)
- 地域作業療法学実習

### プロフィール

学歴：信州大学医療技術短期大学部作業療法学科卒業、放送大学教養学部生活科学コース発達と教育専攻卒業、放送大学大学院文化科学研究科修士選科生(～H24.3)、名古屋市立大学大学院人間文化研究科博士前期課程在学中

専門：精神障害作業療法

研究課題：学生の自我同一性と学生支援、作業療法士志望理由の変遷と学生支援(作業療法士の職業決定に関する研究)、学習の動機付け、など

所属学会：日本作業療法士協会 愛知県作業療法士会 日本作業科学研究会

資格：作業療法士免許

### はじめに

私の専門は、精神障害領域の作業療法です。精神障害領域は、他の身体障害領域等に比べると目に見えない障害を捉えていくため、学生にとっては理解するのが困難です。この学生の困難さをどのように克服していくか、は授業担当者としての私の毎年の課題です。昨年度は、作業療法評価法実習の授業で、私が学生から面接を受け評価される、ということを試みました。学生の皆さんも教室で他の学生方が見守る中面接を実践する授業です。この経験と授業評価の結果からレポートいたします。

### アンケート結果の考察と授業改善への取り組み

設問1の興味深かったか、の設問に関しては、皆さん概ね興味を持っていたようです。設問18の理解できない点などを質問しましたか、と設問19予習・復習などの時間をとりましたか、は

全体の中で若干低い点数でした。理解できない、と感じたけれども、何をどのように質問して良いものか悩んだのだと思います。19についてはこの授業がまさに実践であったからではないかと思っています。

実践およびグループでの取り組みは、自身のことを考えるだけでなく、他の学生やクライアント(ここでは私)のことを確かに観て、感じて、考え、そして瞬時に行動に移してまた、観て、感じて、考え、行動する…、繰り返されることを通して様々なことを「解る」機会となったのではないのでしょうか。

### 学生のアンケート自由記述欄に対する担当教員としての応答

私この授業ではクライアントとして正直に学生の前に出るように努めました。まさに「真剣勝負」の時でした。学生が私に問うことを正直に答えたり、私からも「なぜその問いをするのか」

を学生に問いました。毎回の実習の後には、クールダウンするために面接実習のその場を少し離れ、私も学生方も互いに感想を話したり、セラピストとしての私が学生方にフィードバックし、またねぎらったりと、緊迫した雰囲気も漂う中にもホッと時間を過ごすことが出来ました。

学生の自由記載には、緊張したが、臨場感がありこれから必要であろうことを経験できてよかった、実践を通してでないと学べないことが沢山あった、早く臨床で実践してみたい、改めて評価の難しさを知った、などのポジティブな感想が多く記載されていました。

作業療法は実践の学でしょうから、様々な体験を通し、自身の経験として蓄え新しい試みをしていくこと、は大変に好ましいように見えます。

## 日常の授業で行っている工夫

以前から他の授業でも学生に質問票を記載していただいております。講義後に質問票に記入して私に提出するというものです。

講義されたことやプリントテキストに記載されていることに疑問符(5W1H)を付けただけの質問では、その質問の答えから何が「解る」のか分かりません。私が学生皆さんの質問票に赤ペンでフィードバックし、そのやり取りを通してし続けております。学生方の質問内容が徐々に変わっていくことが例年見て取れます。そういった学生方は、他の科目などでも質問の内容が変わっていき、成績向上につながるのではないかと期待しております。

## 学生に対して伝えたいこと、他の教員に対するアドバイス等

この授業では、学生の皆さんは真剣でどうにかしてクライアントである私を理解しようと努めていましたが、学生が問いをし私が語ったことが「評価結果」となってしまうことは大変に恐ろしいことです。クライアントが語ったその内容そのものだけではなく、その語りの背景にあることやもの、その文脈を読み解くような理解がセラピストには求められると思います。

セラピストの「問い」の意図がより明確でない、より明確な評価にはつながらないのです。その「問う」力を伸ばして、自身の体験を通し自

身の「器」を磨きあげることによる共感力は、より良いセラピーにつながると思います。

昨年度も記しましたが、セラピストは自身の「器」、自身のカラーを磨き、クライアントと共に対話という活動を「創り出していく」必要性を私は感じております。それはクライアントの真の理解や真の力につながると思っているからであります。

学生の皆さんは、これまでの自身を「問い」大人の自身を「創造」して行って欲しいのです。このつながりを是非ご理解いただきたいと思ひます。

## その他、授業、大学の教育について

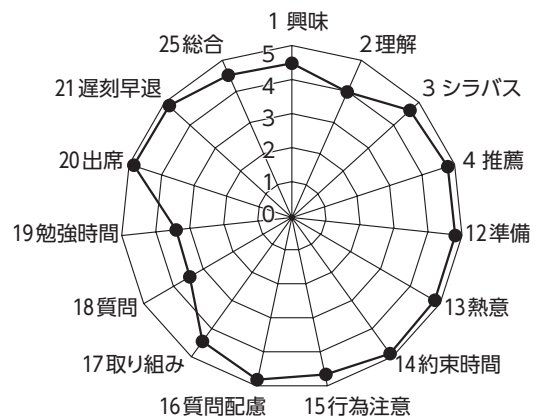
指示したことにただただ従うことを学生に強要してはならない、と日々自身に言い聞かせながら学生に向き合っております。学生にとってその指示されたことの意味が解らないとき、解らないまま指示に従っていても、全く学生に主体性は無いと思ひます。かといってただ「解れ！」と言うのも無謀な話しですから、学生方が解るためには、まずは解らないことを表明すること、自身が何を解らないでいて、それが解ることで更に何が解り、何が出来るようになるのか、の筋道を学生ご自身が作っていきけるような支援がこれからとても重要になってくるのではないのでしょうか。解らない、と表明できることを大いに奨励し、解るために学生が「探索していく」ことを支援していきたいと思ひさせております。

OT評価法実習

1～4 授業内容、12～16教員

17～22学生、25総合

(軸単位：5段階評点)



## 編集後記

この度、第3巻の刊行となりました。教員の方々におかれましては、常日頃から学生に「より興味をかきたてられる」「分かりやすい」授業を提供すべく、授業内容の再検討、進行の工夫、補助教材の追加等の試行錯誤を重ね、悪戦苦闘されている様子は察するに余りあります。

3回のレポートを報告し終えて感じるのは、「昨年よりも授業内容に工夫をこらし、改良を加えたつもりなのに、学生の反応は今ひとつだったなあ…。」とつい溜息交じりの言葉がもれてしまうのは、私だけでしょうか？

レーダーチャートから共通して伺えることは、「勉強時間(自宅学習)の少なさ」です。どうして自宅で学習ができないのでしょうか？通学に時間がかかるから？アルバイトで忙しいから？

いずれにしても「なぜ自宅学習できないのか、その原因を詳らかにし、対策を講じることが学習効果を高める一助となるかもしれません。一筋縄ではいかないことは必至ですが。

FD委員 林 修司

## 編集委員

万歳登茂子(FD委員会委員長)

舟橋 啓臣(FD委員会)

原 和子(FD委員会)

林 修司(FD委員会)

野原 早苗(FD委員会)

田原 靖子(FD委員会)

## 2011年度 学生と教員が共に前進する授業評価レポート

---

発行日 平成24年6月20日

発行者 学校法人 佑愛学園  
愛知医療学院短期大学  
〒452-0931 愛知県清須市一場519  
TEL 052-409-3311  
<http://www.yuai.ac.jp>

編集者 愛知医療学院短期大学FD委員会

Number 07

Number 06

Number 05

Number 04

Number 03

Number 02

Number

